ISSN 1347-6221

東北大学

東北大学史料館だより

No.6
2007 Mar.

TOHOKU UNIVERSITY ARCHIVES NEWSLETTER

第13号
昭29年度入学式
入學者は千四百六十六名
學究第一主義を要望する
高橋学長、新入生に訓示
東京屋

Index

2 東北大学史料館の新時代
史料館長　今泉隆雄
4 第二高等学校創立120周年記念に伴う資料整備事業について
二高尚志同窓会　大島民義
5 東北大学史料館所蔵の第二高等学校関係資料について
7 「学都たらしめよ」
－「学都仙台 明治の学生群像」展より－
8 資料の公開について
9 史料館のうごき
10 お知らせ

上　：昭和29年入学式を報じる東北大学教養部新聞。実際の告辞では「研究第一主義」の語が使われたが、まだ定着していないのか、見出しでは「学究第一主義」と書かれている。
左下：創立五十周年記念式典で式辞を述べる高橋里美（昭和32年6月）

「研究第一主義」と新制東北大学

本学のモットーとしてよく知られる「研究第一主義」という言葉。事実本学は戦前からことあるごとに研究重視を謳い、これを学風と主張してきた。それは澤柳政太郎ら草創期の総長が掲げた理念に由来するものと言われる。しかしこの学風が「研究第一主義」の語で語り継がれるようになるのは、どうやら戦後のことのようだ。

昭和24年に新制東北大学最初の学長となった哲学者・高橋里美（1886～1964）は、就任二年目の昭和26年度入学式で、本学の学風について「この誇るべき伝統の中核を成すものは真理への情熱であった。換言すれば研究第一主義であった。」と表現し、以後実に様々な場で「研究第一主義」の語を意識的に使用している。そして学長として最後の行事となった昭和32年の創立五十周年記念式典でも、この「研究第一主義」を、新制東北大学の軸をなす理念としてあらためて高らかに掲げた。それは、単なる歴史や伝統の強調にとどまらず、戦後の激しい政治・社会変動とそれに伴う大学や学生の変化の中で、あらためて東北大学がどのようにあるべきかを、問いかけるものでもあった。

東北大学史料館の新時代

東北大学史料館長

今泉　隆雄

昨年11月６日より、野家啓一前館長のあとを承け史料館長に就任いたしました。これまで史料館長は図書館長の兼任でしたが、今年から専任の館長を置くこととなり、その初代ということになります。

館長交替に限らず、今年度史料館にはいくつか大きな変化がありました。まず、当館と総合学術博物館、植物園という３つの業務組織からなる新しい組織として、昨年４月に「東北大学学術資源研究公開センター」が発足いたしました。当館がこれまで同様東北大学のアーカイブズとして役割を果たしていくことには変わりありませんが、センターに統合された３施設の緊密な連携によって、各々の組織の活動がより活性化し、東北大学の所蔵する学術・文化資源の収集保存・研究・公開がこれまで以上に積極的かつ効果的に行われるようになるものと考えております。

第二に、大学の所蔵する歴史的公文書の選別・収集・公開に関して、従来の文書管理規程に対する全学的な再検討の結果を反映した「国立大学法人東北大学法人文書管理細則」が四月から施行されました。そこでは保存期間を満了し当館により歴史的価値を認定された法人文書を、史料館に移管することが明文化され、東北大学の公文書館としての当館の位置づけがこれまで以上に明確となりました。同時に多くの重要な法人文書が一定期間を経た後に当館に移管されるように、文書の保存期間も大幅に改定されています。早速今年度よりこの新しいシステムの運用が開始され、本学の歴史を検証する素材となる多くの重要公文書が移管され始めております。

1963年に設置された当館の前身「東北大学記念資料室」は、永く日本の大学アーカイブズのさきがけと言われてきました。しかし今や状況は一変し、全国各地の大学で「大学文書館」等のアーカイブズが設立されています。国立大学だけをみても、北海道、東京、名古屋、京都、広島、九州の六大学でアーカイブズ施設が存在し、大阪大学でも文書館の設置準備が進められています。ただ単に設置例が増えたというだけでなく、大学アーカイブズに期待される役割そのものも、世紀の変わり目を境に大きく変化しています。かつての大学アーカイブズでは、大学史の編纂などで学外から収集した資料や廃棄寸前の学内資料の

保全を図ることが強調されていました。もちろんこうした役割が今も重要であることは言うまでもありません。しかし近年では、大学自身が産み出し管理する公文書等の中核的資料について、体系的・計画的に保存・公開を図っていくことこそ、大学アーカイブズの第一の使命である、との共通認識ができあがりつつあるようです。それはすなわち、いかにして大学自身の重要記録を未来の大学や社会のために残していくか、という点に関わる問題です。大学アーカイブズは今や、大学のアイデンティティや大学運営を将来にわたって支える基盤であり、また大学に関する市民や社会の様々な「記憶」を保存し再生する基盤と考えられるようになってきました。そしてこうした大学アーカイブズの動向は、日本における様々なアーカイブズのなかでも、ひときわ注目を浴びています。

こうした変化は、もちろん東北大学も例外ではありません。当館では2000年12月に前述の記念資料室を改組して「史料館」を発足させ、2002年には『東北大学史料館の将来構想』を、2004年には「東北大学における歴史的公文書等の保存と公開のあり方について」をそれぞれまとめ、上記のような役割を果たす本格的なアーカイブズへの転換を図って参りました。こうした提言をもとに全学的な検討を経て実現したのが、前述した文書移管制度の整備です。もちろん、こうした制度をもとに本格的な大学アーカイブズとしての役割を当館が果たしていく上では、学内の各組織と密接に連携して膨大な資料を効果的に評価選別・収集するシステムを開発していく必要があり、同時に様々な情報技術を駆使した資料公開の方法も開発していかなければなりません。実際にはまだまだ多くの課題がありますが、今後も関係各位のご協力をいただきながら、改善に努めていく所存です。

いよいよ今年、本学は創立百周年の記念の年を迎えます。本学ではこの節目にあたり様々な関連企画・関連行事が計画されております。当館も自ら記念展示「東北大学生の一世紀―学生生活にみる東北大学の百年―」(仮題)を計画し、また学内で行われる他の様々なイベントに対しても直接間接に支援しています。その意味で、まさに今年は、東北大学史料館の真価が問われる年と言えるでしょう。しかし同時に、次の百年に向けていかにして東北大学の歴史を記録として残していくか、という仕事にも、私たちは取り組んでいます。東北大学の過去を振り返るのみでなく、東北大学の未来を支えるアーカイブズとして、スタッフ一同史料館のより一層の充実に努めてまいる所存です。関係各位のより一層のご理解とご協力を賜りますよう、あらためてお願い申し上げます。

第二高等学校創立120周年記念に伴う資料整備事業について

第二高等学校尚志同窓会資料整備委員
大　島　民　義

第二高等学校は、明治19年（1886）の中等学校令にもとづいて翌20年「第二高等中学校」として仙台市に設立されて以来、120年を経過しました。当時の中学校令に基いて、東京大学予備門を第一高等中学校に、大阪の大学分校を第三高等中学校に、新たに仙台に第二高等中学校、第四高等中学校を金沢に、第五高等中学校を熊本にと全国に五校が設けられました。その後明治30年代から官立、公立、私立の高等学校が設けられ帝国大学への予備部門としての役割を果しますが、これら旧制高等学校は太平洋戦争後の学制改革の大波に呑まれて廃校となり、第二高等学校も昭和24年（1949）に東北大学に包摂され同25年に廃校となります。創立以来63年間にわたる歴史と事績を残して終焉を迎えたのでありますがその間二高が世に送った人材は14,000名を超えました。

このように明治、大正、昭和の時代に亘り国家や社会の将来を担い得る人間形成を主軸とした教育制度の下に、第二高等学校は「尚志」の精神を底流とし「雄大剛健」の校風のもとその輝かしい灯をともし続けました。この「尚志」とは明治26年（1893）に発足した校友会に冠せられた名前で、当時の初代校長吉村寅太郎は「志ヲ尚ウストハ貴賤貧富ヲ問ハズ、其職業ノ何タルニ論ナク、苟モ人タルモノハ其心志ヲ高尚ニシ、常ニ清廉潔白ニシテ、寸毫モ卑劣汚穢ノ心術ナキヲ謂フ…」とその発会式で述べています。また雄大剛健は明治44年（1911）第五代の校長に就任した名校長三好愛吉がモットーとして唱えたもので校風の確立に至ったものです。二高の校歌を作詞したのは詩人土井晩翠で、二高では英語の受け持でした。その校歌の一節をひいておきましょう。

二高明善寮に掲げられた「雄大剛健」の扁額

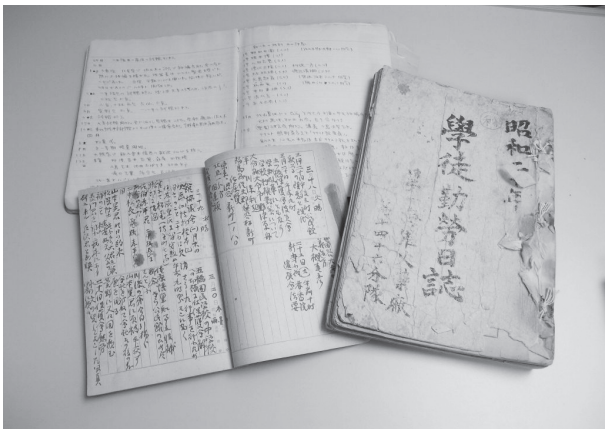
思千里の青雲の　高き理想を身の生命
時の大海岸の砂　絶えぬ進歩の跡のこせ
夕日の西に沈む時　今日は空との憾なく

二高関係資料（主として文書資料）の収集・保存については既に昭和38年（1963）記念資料室発足の当時より進められ、その後収集の充実をはかると共にその目録の整備、収集資料の材質悪化に備えてのマイクロフィルム化が進められて、広く学内外の利用に供すべく備えられて来ました。その間平成13年（2001）二高創立115周年の記念事業として二高同窓会は資料整備の計画を立上げ、収集資料の再整理、材質劣化に対する保存措置、史料としての公開対策等について史料館に協力を行うこととし、それらの経費についての負担支援（約1,000万円）を主とする事業協力を実施してまいりました。従来の史料館職員の方々の並々ならぬご努力と、この同窓会としての支援体勢と相俟って今日ある内容を築くことが出来たものかと存じます。

その内容の主たるものは（１）公文書（人事・学籍関係）（２）学生寮、運動部関係書誌（明善寮、忠愛寮、道交寮、会報、日誌類）（３）刊行物（尚志会雑誌、同窓会報、部史、寮報）（４）写真（５）個人資料（書簡、日誌その他）等で、この内の刊行物についてはデータベースが立上げられ第一次公開用として28誌377点を公開、また写真についてはデータベースが作製、公開されております。

平成18年（2006）秋に第二高等学校は創立120周年を迎えましたが、会員の高齢化等の事情もありその同窓会組織を解散、縮少しました。この資料整備事業は同窓会としての最後の事業として遺されたものですが、今後更に関係資料の充実がはかられる

と共に学内外の多くの方々に利用して頂くことを期待いたします。記録なくして歴史なしと申しますが、これらの資料が今日の教育を省み或いは教育史研究の一助とされるならば、この事業もその目的が達成されたものと云えましょう。今後も引続いて関係資料の充実がはかられることを祈念いたします。



二高関係の日記資料
忠愛寮庶務幹事日誌（左上）
阿刀田令造日記（左下）
船岡海軍工廠への学徒勤労日誌（右）

東北大学史料館所蔵の第二高等学校関係資料について

二高資料の集積過程

現在東北大学史料館に収蔵されている二高関係資料は、伝来のありかたから基本的に三種に大別できる。

第一は戦後二高尚志同窓会に引き継がれ同窓会から当館に寄贈された史料群である。これらはもともと旧二高の校舎を引き継いだ本学の教養部内で保管されてきたが、本学の大学紛争が激化のピークを迎えた昭和44年に資料の保管場所であった教養部事務棟が過激派学生によって占拠され、同窓会関係者と学生との交渉の末ようやく救出される、という事件が起こった。その後あらためて同窓会で保管の体制を検討したが、最終的には当時附属図書館内に居を構えていた記念資料室（当館の前身）を受入先として、あらためて大学に寄贈されることとなったのである。

こうした「記念資料」が比較的早くから当館に収められていたのに対し、逆に二高の公文書類は近年になって当館に集約されるようになった。これらは本学の文書管理制度の整備によって、保存期間を満了した歴史的公文書として移管されてきたものである。

そしてこれらを補完するものとして徐々に集積されてきたのが、元教職員や卒業生、その他関係者から寄贈された個人資料である。当初は記念展示の開催時に同窓会の音頭で資料収集を行うことが多かったが、近年では当館が直接関係者から資料寄贈を受けるケースも多い。現在こうした個人資料は、寄贈者数では約150名。資料点数は1200点程度にのぼっている。

二高資料の概要

①公文書類

二高公文書は、昭和20年（1945）の仙台空襲時に焼失したものが少なくなかったと思われるが、教職員および学生管理に関する基本記録（教員履歴簿、外国人教師契約書、学籍簿、学生名簿等）については明治・大正期以来の記録が残され、これに戦争末期・終戦直後期の庶務関係書類（戦災関係、尚志会関係）が加わる形で新制大学発足後教養部に引き継がれた。その後学生関係書類は教育学生支援部に、その他は国際文化研究科等事務部に引き継がれ、平成14年（2002）から平成16年（2004）にかけて当館に移管されている。その殆ど全てがすでにマイクロフィルム化されており、目録情報も一部は当館ホームページ上の「移管法人文書データベース」で公開されている。なお教官会議等学校運営に関する意志決定機関の記録は残念ながら残されていなかった。

なおこれら大学に引き継がれたものの他に、同窓会で保管されてきた書類が若干存在し、これらも今回すべて当館に移されることとなった。船岡海軍工廠における勤労動員の記録など勤労動員関係資料が多く含まれており、今後調査・公開を進めていく予定である。

②雑誌・刊行物

『第二高等学校一覧』、『尚志会雑誌』、『同窓会報』をはじめとする学校刊行物は、本学附属図書館と尚志同窓会の双方に引き継がれてきたが、現在は双方とも当館に集約されている。これらについてはやはり当館ホームページ上にて「第二高等学校刊行物デー

タベース」を公開している。

③物品資料（いわゆる「記念資料」）

二高時代に使われた物品等の資料のうちいくつかは、戦後二高の記念資料として同窓会の管理下に置かれていたが、昭和49年（1974）にその多くが本学に寄贈され以来当館で保存を行ってきた。現存最古の旧制高校の校旗といわれる明治38年（1905）製作の蜂章旗、生徒自ら作成した玄関上に飾る木彫りの大きな校章、安井曽太郎の代表作「T先生の像」を含む歴代校長の肖像画、さらには二高を代表する寄宿舎・明善寮の記録類など、二高に関するシンボリックな「記念資料」である。

④寮・部関係資料

寮関係の記録としては、明善寮と忠愛寮の記録がまとまって保存されており、今回の事業でやはりマイクロフィルム化されている。

現在も東北大学の寮名として引き継がれている明善寮は明治39年（1906）に二高の第三次寄宿舎として開かれた寮で、寮史編纂の際にまとめられた文書、日誌、写真等の関係資料がまとまって保存されてきた。さらに今回の120周年記念事業による資料収集の過程で、寮幹事であった方々の手許に遺されていた各分寮の日誌が若干追加されている。また二高キリスト教青年会である忠愛之友倶楽部の寮「忠愛寮」の資料も大正期から戦後に至るまでの時期のものが揃えられており、旧制高校のみならず戦前・戦中期のキリスト教信仰の実態を知る資料としても貴重なものとなっている。このほか、尚志会各部の雑誌や印刷物も可能な限り当館に集められている。

⑤教員個人資料

二高の教員が遺した個人資料は必ずしも豊富とは言えないが、それでもいくつかの重要な資料がこの事業の過程で収集され保存されている。例えば戦前・戦中期に校長職をつとめ、また二高の卒業生でもある阿刀田令造の資料。二高在学中の日誌から校長在職中の日誌・手帳類に至る資料がやはり今回の120周年記念事業の過程でご遺族から寄贈されることとなり、今後整理・公開を進めることで当該期の旧制高校の実像がさらに明らかになると期待される。このほか阿刀田の後任として戦中・終戦直後期に校長を務めた野口明の関係資料、明治30年代後半に校長職をつとめた中川元の関係資料など校長の関連資料が若干ながら集積されている。

二高関係資料のマイクロフィルム

⑥同窓生の個人資料

当館で所蔵する二高関係の個人資料の大半は、記念展の開催などを契機に卒業生である同窓会員から寄贈を受けた学生生活関係資料である。その内容はバラエティに富み一括して紹介できるものではないが、学生時代の受講ノートや教科書、徽章やメダル、絵はがき等の記念品、日誌類、アルバムや写真資料など、学生生活の実像を反映する多様な資料が存在している。

二高資料の公開状況

二高創立120周年の資料整備事業の主眼は、資料の収集と共にその保存・公開のための環境整備を図ることにある。今回の整備事業でも、これらの資料の収集整理以上に、保存公開のための事業を重点的に実施した。具体的には、①当館にて所蔵する二高関係資料のデータベース化とその公開、②二高公文書・刊行物及び重要な個人資料のマイクロフィルム化および閲覧用複製の作成、③二高関係写真のデジタル化とその公開、といった事業が中心的な事業として行われた。データベースについてはまだ全てを公開するに至っていないが、公文書、刊行物、写真のデータベースはすでに公開済みであり、利用者からも好評を得ている。その他についても、近日中に公開を行う予定である。

（史料館助手　永田英明）

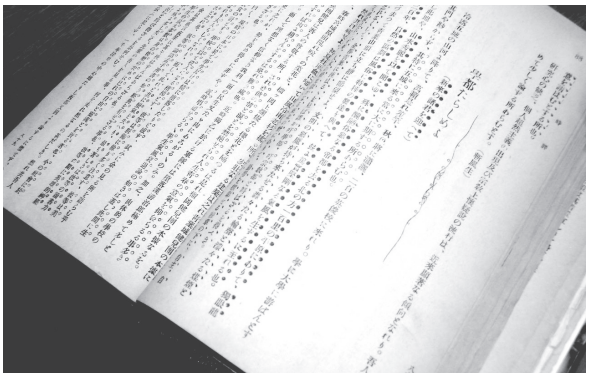
「学都たらしめよ」

―「学都仙台 明治の学生群像 東北大学がなかった頃」展より―

平成18年10月20日から12月27日まで「学都仙台明治の学生群像　東北大学がなかった頃」展を開催しました。明治20年（1887）に仙台の地に誕生した第二高等中学校（のち第二高等学校）には、東北という枠を遙かに越えて全国から若者達が集まり、そこで知り合った学生や教師達の交流の中から、様々な学生文化が仙台の地に咲きました。展示ではこの明治期二高の学生文化の諸相について、学問・スポーツ・文芸・ファッション・学生思想といった様々な角度から関連資料とともに紹介しました。

同時に、「学都」という言葉が、明治後期の二高生達の間で使われていた言葉であることも紹介しました。現在知られる限り、仙台を「学都」と呼んだ最も早い例は、旧制二高の校友会誌『尚志会雑誌』に明治38年(1905)に掲載された「学都たらしめよ」という、上級生が新入生に向けて書いた文章です。そこでは、東京・京都や金沢・岡山といった都市との対比で、仙台を「最善最美日本唯一の学都」たらしめることが、旧制二高の学生の使命として語られています。当時仙台では高等教育機関の増設・拡充が相次ぎ学生人口が急増していました。当時の仙台市長は仙台を「教育地」と呼び、学生に対する監督強化など様々な教育政策を実施しますが、二高の学生たちはこれに反発し、むしろ二高生こそが仙台市民を「学都化」させる主役とならねばならない、という意気込みを当時の『尚志会雑誌』に頻繁に書き記しています。

「学都」の語は、当時の学生達にとって、自立した学生であるというプライド、そして都市仙台の気風を担わんとするエリート意識を込めた言葉だったのではないでしょうか。



「学都たらしめよ」『尚志会雑誌』67号

明治30年代なかば頃の二高生

ミニ展示

宮城女専ものがたり－学都に集う女学生－

平成18年７月３日（月）～８月10日（木）

大正15年（1926）に北日本初の女子高等教育機関として誕生した「宮城県女子専門学校」。東北帝国大学に最も多くの女子学生を送り込んだ同校は、戦後学制改革のなかで東北大学に併合され姿を消しました。展示会では大正末から戦後までの約四半世紀の同校の女学生たちを、写真や資料を通じて紹介しました。

昭和初期の女専生（漢文の授業にて）

資料の公開について

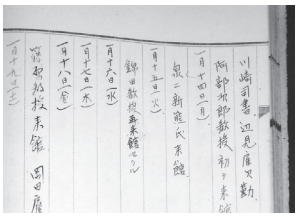
史料館では、公開準備が完了した資料の目録を順次ホームページ上で公開しています。平成18年（2006）１月から12月までの間に目録を新たに公開した主な文書は、以下の通りです。

※個人に関する情報の保護等のため、閲覧を一部制限する文書があります。

◆ 移管法人文書

附属図書館移管文書（第１次公開）134冊

戦前期を中心とする時期の図書館事務文書。庶務および図書管理・閲覧等に関する日常的な事務書類であり内容は多岐にわたるが、図書館運営の現場や学内の状況を知ることが出来る多様な情報が含まれる。



阿部次郎教授の赴任を記す
図書館館務日誌

旧学務部入試課移管文書（第２次公開）189冊

（学位授与関係文書　平成14年度受入分）

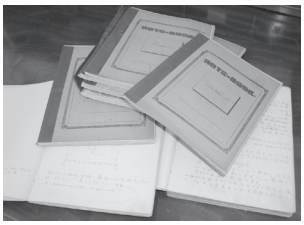
大正9年（1920）以降、昭和37年（1962）までの博士号取得者に対する学位授与に関する記録。申請者の提出書類から審査委員会への付議、審査要旨報告、授与決定の決裁にいたる一連の手続書類が編綴されている。

学位授与関係文書

◆ 個人資料

本多光太郎文書　125点

明治44年（1911）から昭和22年（1947）までの36年間本学に在職し、途中9年間総長をつとめた本多光太郎（1870 ～1954）の手稿等。明治末から大正期にかけての本多の原稿、ノート、実験記録などが中心で、多くは研究活動に関するもの。著名な金属材料や物質の磁性などの研究のほか、若い頃手がけた地球物理学的研究に関するものも含まれる。また鉄鋼研究所の拡張計画に関する文部省関係者への書簡草稿など大学行政に関わるものも若干含まれている。



本多の研究・実験用ノート

高柳眞三文書　15点

明治期家族法や江戸期刑事法等を中心に法制史の分野で幾多の優れた研究を残した高柳真三（1902 ～1994）が遺した、戦後本学教養部長等を努めた時期の入学式・卒業式等での訓示原稿等。『学報』等には掲載されなかった原稿も多く、新制大学発足時の本学の教養課程教育に関する資料として貴重なもの。

宮城音五郎文書　23点

大正8年（1919）から昭和20年（1945）までの26年間本学工学部で教授を務め、戦後は仙台一高校長、宮城県教育長、宮城県知事、東北工業大学初代学長等をつとめた宮城音五郎（1883 ～1967）の資料。昭和初期から戦後にかけての宮城の日記手帳と、その他のノート、原稿類からなる。日記手帳からは戦前・戦中期の大学の状況を知ることが出来、また宮城が折々に詠んだ俳句を記した『俳句手記』も興味深い。

伊東信雄文書　84点

東北地方の先史・歴史考古学に指導的な役割を果たした考古学者、伊東信雄（1908 ～1987）の関係資料。辞令など伊東の大学教員としての履歴に関わる資料と、二高時代から戦後東北大学時代の記念写真が中心。

成瀬政男文書　17点

大正14年（1925）から昭和36年（1961）まで工学部の教官を務めた機械工学者、成瀬政男（1898 ～1979）の資料。学術会議第十四委員会（科学研究成果の実用化促進に関する委員会）に対する東北大学工学部の意見に関する検討文書を中心に、科学教育振興協議会や中央産業教育審議会産業教育教員養成専門部会関係資料などが含まれる。

◆ 画像データベースの公開

東北大学関係写真データベースの増補公開

史料館で公開している『東北大学関係写真データベース』にこのたび2302点の写真が追加され、公開総点数は5272点となりました。東北大学や旧制二高等関連学校に関する明治期から現代にいたる多数の写真を見ることが出来ます。

東北大学動画アーカイブズの公開

「東北大学メールマガジン」第４号（2006年夏号）および第６号（2006年冬号）にて、アインシュタインと共に20世紀を代表する原子物理学者といわれるニールス・ボーアの来学時（昭和12年）に撮影された記録映像（写真左）および東北大学創立五十周年記念式典の映像が電子化され配信されています。動画映像は史料館ホームページのほか、東北大学メールマガジンのページ（下記）からも閲覧できます。

http://www.alumni.tohoku-university.jp/index.html

史料館のうごき

○法人文書の移管について

当館では、「国立大学法人東北大学法人文書管理細則」に基づき毎年保存期間を満了した法人文書のなかから「本学の歴史に関する資料的価値」を評価選別し移管を受けています。平成18年度における各部局からの文書の移管状況は以下の通りです。

総務部企画調整課	110	教育学生支援部入試課	2
総務部総務課	14(11)	大学院文学研究科	2
研究協力部研究協力課	5	大学院教育学研究科	1
人事部人事課	52(52)	大学院法学研究科	2
財務部財務課	4	大学院経済学研究科	1
財務部資金管理課	2	大学院理学研究科	2
情報部情報基盤課	1	大学病院	4
教育学生支援部学生支援課	16	大学院工学研究科	6
教育学生支援部教務課	5	金属材料研究所	18
教育学生支援部学務課	4	多元物質科学研究所	21(20)

※　カッコ内は法人文書ファイル管理簿未登録文書の移管数(内数)

○大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」研究会開催

平成18年9月23日(土)、東北大学片平会館において「大学所蔵の歴史的公文書の評価・選別についての基礎的研究」研究会が開催されました。この研究会は同名の科学研究費共同研究（研究代表者：西山伸京都大学大学文書館助教授）による研究活動の一環として行われたもので、全国各地の大学アーカイブズにおける大学公文書の評価・選別に関する理論的及び実践的課題について、各地の大学や自治体等の公文書館を会場に研究会を積み重ねています。当日は「公文書の選別･廃棄作業に対する疑問･問題点について」(谷本宗生東京大学史史料室助手）および「東北大学における評価選別の現状と課題」(当館永田英明助手）の２本の報告と、史料館の見学会が行われ、活発な意見交換が行われました。

史料館文書庫の見学

東北大学の
学生生活に関する資料を探しています！

本学創立百周年にあたる今年、当館では東北大学の学生生活をテーマとする企画展の開催を計画しており、戦前から現代に至るまでの本学の学生生活を物語る資料を探しています。下記のような資料をご所蔵の方がいらっしゃいましたら、お手数ですが是非ともご協力をいただきたく、当館までご一報をよろしくお願いします。

・学生時代に着用した制服・制帽
・大学祭ほか学生行事に関する資料
・部活動・サークル活動等に関する資料
・寮生活に関する資料
・学生運動に関する資料
・学生新聞など学生団体の発行した新聞・雑誌
・本学キャンパスで撮影した写真、映像資料等

連絡先　〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1　東北大学史料館
TEL　022-217-5040
FAX　022-217-4998
Mail　kinen1@mail.tains.tohoku.ac.jp

史料館利用案内

閲覧室
閲覧日　毎週火曜・水曜日　10:00～12:00／13:00～16:00
上記以外の日をご希望の方は、あらかじめ電話等でご相談下さい。
利用資格　特に資格はありません。学外の方も気軽にご利用下さい。
閲覧資料　東北大学の歴史的公文書／学内で発行された印刷刊行物
本学元教職員・卒業生等の個人文書／本学の歴史に関する図書資料

展示室
公開日　毎週月曜～金曜　10:00～16:00　（16:00までにご入館下さい）
常設展示　歴史のなかの東北大学／東北大学の包摂校－もうひとつの源流

※その他、テーマに即した企画展等を随時開催しています。

東北大学史料館だより　第６号　2007年３月１日発行
編集・発行　東北大学学術資源研究公開センター史料館
〒980-8577　仙台市青葉区片平2-1-1　tel　022（217）5040
E-mail　kinen1@mail.tains.tohoku.ac.jp　URL　http://www.archives.tohoku.ac.jp